第十二節　昭和から平成へ

一、昭和天皇崩御

昭和天皇（第百二十四代、御名、裕仁）には、昭和六十四年一月七日、皇居吹上御所で崩御された。

本校では、直ちに弔旗を掲げ哀悼の意を表し、一月七日より十二日まで喪に服した。一月九日、第三学期の始業にあたり、学院長先生は、中高教職員及び全校生徒に対し、陛下崩御についての謹話を行い、ともに陛下の崩御を悼み、黙禱を捧げた。

二、学院長大喪の礼に参列

昭和天皇をおくる「大喪の礼」が、天皇崩御より四十九日にあたる平成元年二月二十四日に行われた。

この日は、国民の休日として国をあげて弔意を示すこととなった。会場となった東京の新宿御苑には、一六三ヵ国から史上最多の弔問使節をはじめ、内外の代表約一万人が参列し、夜来の冷たい雨に小雪のまじる中で、厳かに営まれた。

宮内庁及び内閣よりご案内をいただき、学院長先生は、大喪の礼に参列された。

第十三節　学院長叙勲の栄誉

一、勲三等瑞宝章に輝く

伊藤一郎学院長には、多年にわたり学校教育並びに社会教育、その他の関係団体等の振興推進に寄与された多大なご功績により、平成二年春、勲三等瑞宝章ご下賜の光栄に浴された。

平成二年四月二十九日、叙勲の公式発表があり、五月十一日に、東京青山の日本青年館において、勲記、勲章の伝達式が行われた。当日、学院長には、奥様ご同伴でご出席になられ、皇居「春秋の間」において天皇陛下に拝謁され、親しくねぎらいのお言葉をいただいた。

叙勲にあたり、学院長はこう述べられた。「自分のように、なお現職にあって、日々の仕事に追われる身が、このような光栄を受けることに感謝している。叙勲は人生の一つの節目であるといわれる。しかし、このことで人生への情熱を失ってはならないと思う。皆さんに祝福される自分の幸せをかみしめて、さらに心をひきしめて、自分に残された仕事に意欲的にとりくんでゆきたい」

二、叙勲祝賀会開催

平素、学院長にご交誼とご教導をいただいている方々により、二度にわたって叙勲祝賀会が催された。

一回目は、平成二年三月三日に、沼田武千葉県知事を発起人とする祝賀会が、幕張プリンスホテルに於いて行われた。会場には、国会並びに県議会の主だった議員の方々をはじめ、県教育委員会、県私学関係者等各方面から、約四〇〇名に及ぶ多数の来賓の臨席をいただき、沼田知事の発起人代表のご挨拶をはじめ、前文部大臣石橋一弥衆議院議員、日本私立中学高等学校連合会堀越克明会長他、多数のご来賓よりご祝辞をいただき、盛大な祝賀会であった。

学院長先生、叙勲祝賀会

二回目は、同年六月十日、帝国ホテル「富士の間」において、前文部大臣石橋一弥衆議院議員を発起人として、昭和学院関係者、教職員、父母、卒業生等四五〇余名の多数の出席者のもとに、盛大な祝賀会が催された。

祝賀会は、琴の演奏と共に学院長ご夫妻がご入場になり、石橋一弥発起人代表のご挨拶ではじまった。井上裕参議院議員、臼井日出男衆議院議員、佐久間彊県私立中学高等学校協会長、高橋国雄市川市長、峠良三奨学会長他、多数の来賓の方々からご祝辞をいただいた。また、学院長の三人のお孫さんをはじめ、父母や卒業生から、学院長ご夫妻に花束が贈呈され、会場は祝意に満ちあふれ、とても和やかな会であった。

学院長謝辞

この度、私は勲三等瑞宝章の叙勲の栄誉に浴しました。これは、偏に皆さまのご厚情の賜で、心よりお礼申し上げます。時を同じくして、本年は、私達の昭和学院が創立して五十周年という記念すべき年であります。この年に、私が叙勲を受けることができますことは、感無量のものがあります。

私が、教育の道に入りましたのは、この学校が創立されて三年目であり、当時の昭和女子商業学校の教師となりました。今から四十八年前のことであります。当時、戦中戦後の苦難の時代がつづきました。そして、戦後間もなく、学校制度が大きく改められ、六・三制が実施されました。本学院も六・三制の改革にしたがって、短期大学より小学校に至る総合学園に発展し、現在の基盤ができあがりました。

昭和三十六年三月、私は父に代わり、本学院の教育のすべてを引き継いで、昭和四十年一月からは、父の死去により、理事長を兼ね、教育と経営の両面を担当することになりました。

以来、私は、すべてにわたり、教育内容の充実、施設設備の整備につとめ、新しい時代に即応する特色ある教育の実践につとめました。

中学校高等学校の教育についてみますと、視聴覚教育、図書館教育、その他について、その内容の充実につとめてきましたが、その優れた実績が高く評価され、一昨年千葉県で実施された全国私学教育研究集会では、これら二部門を本学院が担当し、多数の先生方に、その研究成果を公開することができまして、大変嬉

しく思いました。他面、クラブ活動などを奨励し、とくにスポーツ各種目では、県及び全国などで優勝または入賞しており、短期大学もまた優れたスポーツでの実績をあげて、この面でも、本学院は全国的に周知されています。

短期大学の教育については、更に研究、実習施設を整え、短期大学にふさわしい教育を実施するように努力しています。

また、幼稚園、小学校は、地域社会と密着し、その信頼をうけています。とくに、小学校での読書教育、読書感想文の教育は抜群で、そのコンクールでは、全国最優秀を連続四回受賞するという稀にみる成績を収めました。

千葉市幕張に新たに開設した秀英中学校、高等学校は、創立七年目となりますが、男女共学の特色を発揮し、優秀な生徒を育て、進学成績をあげています。

また、本学院唯一の、職業教育を実施する栄養学校は、数多くの栄養士を養成し、社会に送り出しています。

私学の経営は、正しく「いのちがけ」の至難の仕事であります。私は殆ど休日もなく、学校の一層の発展のため、満身の力をふりしぼってこれに当たってきました。思えば、よくもこうしてやってこられたものと思うこともあります。

さて、私は学校の他に、長らく私学関係の役職をつとめ、日本私立中学高等学校連合会の副会長として、

私学振興に精一杯努力しました。それと、本県私学の会長を今まで十八年の長きにわたりつとめました。微力でありましたが、本県私学は発展し、全国的に注目されていますことは、大変嬉しいことであります。

この間、私は教育功労により、藍綬褒章をはじめ、文部大臣表彰を何度かいただき、身にあまる光栄に浴してきました。そして、この度は、私の四十八年の私学教育におけるつたない歩みに対し、叙勲の栄誉を受けました。先般、皇居において、天皇陛下に拝謁し、ご丁重なねぎらいのお言葉をいただき感激ひとしおのものがあります。私は、叙勲はある意味において、人生の一つの結実であると思います。これからの自分はどうあるべきか考えてゆきたいと思います。

私は幸い健康でありますから、これからは、次代を担う若い人達とともに、新しい時代にふさわしい教育をめざして、命の限り尽力して参りたいと思います。

三、叙勲雑感——叙勲の栄誉に浴して——

学院長　伊　藤　一　郎

その一

私は、この度、勲三等瑞宝章という栄誉に浴した。感慨ひとしおのものがある。叙勲についてある人がこんな話をした。褒章の場合は、誰もが同じに扱われるが、勲章は等級が定まり、しかもそれが人間の評価にかかわるようで貰いにくい。私にはこの言葉が強く印象づけられた。そのことが私自身、叙勲に熱心でなか

った原因なのかもしれない。

私の叙勲についての問いかけはあった。私はまだ齢がそこまでいかないからと答えていた。叙勲年齢の七十歳は過ぎている。周囲の期待もある。特に、学校の創立五十年の年でもある。このような事情から、この度の叙勲申請を文部省に提出する。本県出身の衆議院議員で、私たちの尊敬する石橋一弥先生が文部大臣に在任されていた。こうして、平成二年の「春の叙勲」を受けることになった。

勲記、勲章の伝達は、五月十一日に、その後皇居で天皇陛下に拝謁ということであった。

正式の決定後、まず考えなければならないことは、「祝賀会」のことであった。会場を幕張プリンスホテルに予約する。それは私学関係者を中心として、千葉県知事沼田武先生を発起人代表にお願いし、六月三日に開催する。別に、昭和学院関係者について、帝国ホテルを会場として予約する。そして石橋一弥先生を発起人代表として、六月十日に開催することとした。

早めに準備しなければならないものに記念品のことがある。記念品としては何が適当か、出席される方に喜んでもらえる品と考えると、なかなか難しい。妻があちこち探し回って、やっと適当な茶器（コーヒーカップ）を選び、そのデザインに手を加え、私のイニシアルを装飾的に入れ、注文する。慌ただしい。祝賀会関係の印刷物の作成、案内者の名簿の整理にとりかかる。私学関係者については私学の事務局が担当し、昭和学院関係は各校分担で作成する。皆協力してくれてありがたかった。

また、色々の体験をした。一つは、今までにない数多くの祝電、祝辞をいただいた。新聞で知った人が大

部分で、新聞報道の大きな力を感じた。千葉日報のインタビューの記事も多く読まれたようだった。すばらしい讃歌をつくり、特に感激したのは、その記事を通して私にお送り下さった方がある。その方は、八千代市在住の定形博史氏という方で、私の全く面識のない詩人である。

二つは、驚いたことに勲記、勲章の額、それに叙勲記念品のカタログが、各商社から数多く届けられたことである。表紙も内容もしっかりした平成二年春の出版物である。私は今から十余年前に藍綬褒章を受けたが、その時はこんなことはなかった。情報化時代を如実に物語っている。

叙勲の感想を問われる。私はこう思う。叙勲というのは、功成り名を遂げた人に贈られる栄誉であり、私のように現職にあって、日々の仕事に追われ働くものがいただくことは恐れ多いことであると思い、その栄誉をお受けすることに感激している。そして、これから自分自身どのように身を処すべきか強い責任を感じている。また叙勲は人生の一つの節目である。叙勲にあたって自分もその齢になったのかと感無量なものがある。しかし、一面このことで人生への情熱を失ってはならない。まだ自分に残された仕事は多い。私は、皆から祝福される自分の幸せをかみしめ、さらに心をひきしめ、これからの人生を意欲的に進んでゆきたいと思う。

その二

五月十一日、私の生涯忘れることのできない日である。東京代々木の日本青年館ホールで、勲記、勲章の

伝達が行われ、その後、皇居に参内し天皇陛下に拝謁ということである。天気は晴、午前十時五十分までに受付を済ませて式場に入る。

午前十時五十分ごろ指定の座席に着く。開式三十分前まだ時間がある。その間いろいろなことを考えた。大学卒業当初、自分にとって教育の道に進むことが適しているかどうか疑問であった。しかし父の強い要望からこの道に入り、既に四十八年の歳月が流れ齢七十三歳を数えた。蛙の子はやはり蛙の子かと思いながらその道一筋に歩んできた。思えば、この道の他に私の歩む道はなかった。そして今日この栄誉を受けるにあたって、私は悔いのない人生であったことを感じ、父母の恩、それに私をとりまく多数の人達の力添えをありがたく思った。

妻の功績を讃えて「内助の功」と人は言う。何か儀礼的な言葉のように聞こえるが、私にとってはその言葉の通りである。私自身、自主自立の人間であると思いながら、私の生活の技能はまことに弱く他に頼りがちである。妻は、私の身の回りのことすべてやってくれる。細かなことにも気がつく。しかも、進んで助力してくれる。私の生活は、妻あっての生活であることはいつわらない事実である。ふだん口にしたことのない感謝の気持ちが今日は自然にわいてくる。

午前十一時二十分、伝達式が始まる。十一時五十分に終わる。それぞれ、勲記、勲章が手渡され、勲章を佩用する。私のいただいた勲三等瑞宝章は、淡藍で橙色の双線がしてある中綬で、喉下に着用することになっている。中綬を首に掛け勲章がネクタイの結び目の下にいくように調節して着用するものである。

午後十二時五十分、バスに分乗して坂下門から皇居に参内する。午後二時、皇居「春秋の間」で天皇陛下に謁見、ねぎらいのお言葉をいただく。昭和天皇につづいて、若き今上陛下に拝謁できた喜びを嚙みしめた。煙草、菓子を賜る。その後二十数名宛で記念撮影をし帰路に着く。バスは乾門を経て東京駅丸の内まで送ってくれた。

私には、叙勲の喜び、そして、今それが現実だという感激は大きかった。ただ、朝早くから長時間車に乗り、しかも、感動と緊張のひとときを過ごしたことから幾分疲労を覚えた。妻は大変元気で、うれしさいっぱいのようだった。多分明日あたりに疲れが出るだろうと話をしていた。人生最良の日は、長い一日としてこうして終わった。

その三

平成二年六月三日、天気は快晴、午後四時半過ぎ、千葉市の幕張プリンスホテルにおいて私の最初の叙勲祝賀会が開催された。千葉県私学事務局がその仕事を受け持ち、千葉県知事沼田武先生を発起人として、本県はじめ関東都県の私学関係者、衆参両院議員をはじめ私学行政にあたる方々、その他教育方面の有力な方々、私が現在、千葉県市町村教育委員連絡協議会の会長を務めているので教育委員の幹部の方々を、広くご招待した。

当日は、千葉県知事沼田武先生、前文部大臣石橋一弥先生をはじめ、平素、私がご指導とご交誼を受けて

いるお歴々の方々が、日曜日の午後にも拘らず多数ご都合をつけてご出席下され、深く感激をした。その総数は四〇〇名ということであった。私は、このような慶事には、発起人の一人としてお祝いする方にまわっているが、この席は、お祝いされることで妻と壇上にすえられ、皆さんから祝福されて、なんとも面映ゆく、数々の讃辞に内心忸怩たるものがあった。

ご祝辞は、昭和学院の発展に寄与したこと、あるいは、全国私学の役員として私学振興に努力したことを誉め称えた。なかには、長戸路信行先生のように、私はあまり働きすぎる、今少し齢を考えて仕事を減らすべきであるという、親身になったお言葉もいただき、ほんとうにありがたく思った。

私は会場をまわり多数のみなさんにご挨拶した。この点、妻は知らない人が多く、とまどっている様子で気の毒だったが、千葉県知事沼田武先生の「今日は久し振りに奥様にお会いできました」の言葉は、きっと本人にとり深い感銘であったことと思う。ご来会の皆さんのご厚情に感謝し、今までにない快さを感じた。この中で私は「謝辞」を申し上げた。

六月十日、日曜日、帝国ホテルで二回目の祝賀会を開催する。前夜来の大嵐で、天候がどうなることか心配したが、不思議に当日は晴れてすっかり安堵した。

この度の祝賀会は、前文部大臣石橋一弥先生を発起人代表として開かれた。諸先生方には大変お力添えいただき、深く感謝している。

今回は、私の知己、それに学校関係者、教職員、ご父兄、同窓会といった、いわば私の身近な方であった。

四五〇名の多数の出席者があり盛会であった。会場は、帝国ホテル「富士の間」で、帝国ホテルでの最大の会場であり、それを提供して下された帝国ホテル関係者に感謝している。また、石橋一弥、井上裕、臼井日出男先生その他、私が色々とお世話になっている多数の方々がご来場下され、大変うれしく思った。会場は広く、ゆとりがあり、とくに今回は女性が多く、皆さん着飾って大変美しく、また賑やかであった。山本、東郷、水野の三人の孫の女の子達の花束贈呈はかわいらしく心にしみるものがあった。

私がほっとしたことは、両会場とも、お出ましを予定した方がすべてご出席下されたこと、それに、帝国ホテルの会場では、私の一族の全員が出席できたことである。誰かが出張でもあって出席できないと困るなと内心不安であったが、幸い支障なく出席できた。早速、式後、家族全員で帝国ホテルの写真室で撮影をした。会がすべて終了し、その時点では、緊張していたせいか、さほど疲れを感じなかったが、二、三日すると安堵感からか疲れが出て、その後一週間はどことなく元気がなかった。やはり、多数の皆さんに囲まれてお祝いをうけ、それに応えることは疲れるものだとしみじみ思った。

第十四節　創立五十周年を迎えて
――相次ぐ記念事業――

洗心館新築落成

創立五十周年記念事業の一つとして、最初に多目的教室を含む武道場の建設が計画され、昭和六十三年十月に着工、翌平成元年三月に完成した。

この建物は、本学院東南角地に位置し、鉄筋二階建て、床面積四二六・六平方メートル、一階は多目的教室、二階は剣道場で、外観はガラス張りで斬新なデザインの建物であり、修養の場という意味から「洗心館」と命名された。

剣道場開きは、平成元年四月十七日、中高剣道部員をはじめ、中高運動クラブ代表、教職員有志の参加のもとに挙行された。はじめに、香取神宮から拝受した御神器を奉納し、ついで、本県最高の剣道教士、石川宏七段、島田幸雄七段による日本剣道型の演武が披露され、緊張感と迫力漲る真剣捌きに、場内は固唾を呑んで見守った。こうして厳粛の中に、武道場開きは終了した。

教学館新築落成

平成元年十月、学校から徒歩で十分程の宮久保の教職員寮の跡地に、記念事業の一つとして、研修館が完成し、学院長によって「教学館」と命名された。これは、中国の古典『礼記』巻十八学記の中の「学びて然

洗心館

る後に足らざることを知り、教えて然る後に因しむを知る」からとったもので、その名の示すように、教職員の研修及び生徒のスポーツ、文化活動、学習活動などの宿泊研修に利用されるものであった。

この施設は、研修室一室、四人収容の個室一〇室、指導教員室一室、食堂一室、厨房室、浴室などを備えた冷暖房完備の鉄骨二階建ての研修施設である。また、別棟に管理人棟がある。なお、研修室及び食堂の机、椅子、厨房の諸設備は、母姉会のバザー収益積立金から寄贈されたものであった。

講堂の大改修

大講堂は、昭和三十五年、創立二十周年記念事業として建設されたもので、老朽化が目立ち、改修は緊急事態であった。

改修工事は、平成元年六月に着工し、突貫工事の末、十月末に完成した。

工事内容は、まず、屋根をステンレスに葺き替え、正面外壁をタイル張りにした。正面玄関のピロティには扉を設け、中央には平成二年七月に田中寿子氏作の少女のブロンズ像「ながれ」が設置され、風格のある玄関ホールになった。また、窓枠はアルミサッシに取り替えられた。

内部は、まず、ステージの両サイドに袖が設けられ、床は一、二階ともすべて張り替えられ、二階席の椅子を新調した。また、二階席後方の来賓室及び放送室、映写室を改修し、最新の放送機器や十六ミリ映写機、調光装置が設置された。

照明関係は、ボーダライトの増設、サイドスポット一二基の設置、ステージのルックスの倍増が実現した。さらに、スライダックス装置や三色の光を映し出すホリゾントスクリーンが設置されており、すべての照明は、映写室の調光調整卓によってコントロールできた。

音響関係は、天井を波状にし、側面には吸音板を張り、残響音をセーブした。スピーカーは、米国アルテックス社製の大型スピーカーをメインに二基、その他、サイドに二基、天井に六基、後方に六基設置し、優れた音響効果を出せるように設計されていた。他に、最新の機能を誇るエレクトーンが設置され、迫力ある重低音、透明で澄んだ高音、それにあらゆる楽器の音色を出すことができた。

オーディオ調整室

また、場内で一際目をひくのは、「平成」という新しい時代の幕開けにふさわしく、雄大な雲海を思わせる「波静か」を表現した第一緞帳であった。

このように、新装なった大講堂は、本学院東北角地に位置し、収容人員約二、六〇〇人という偉容を誇り、入学式や卒業式等の式典をはじめ、芸術鑑賞等に供される本学院のメモリアル大ホールであった。

なお、第一緞帳その他の幕類は、昭和六十三年度、第四十回高校卒業生の父母の寄贈、第二緞帳は、同窓会の寄贈、少女のブロンズ像をはじめ、

来賓室の机椅子などの備品は、平成元年度、第四十一回高校卒業生の父母の寄贈によるものであった。

大講堂改修の他に、創立記念館について、屋根、下見板の補修、畳、襖、絨緞の新調、通用口の新設を行い、伝統ある和風建築の保存につとめた。また、山梨県清里高原の「八ヶ岳山荘」についても、アルミサッシ、畳、襖の新調、その他様々の補修を行った。

少女のブロンズ像建立

大改修され新装なった大講堂のピロティに、少女のブロンズ像が設置された。

これは、第四十一回高等学校卒業生の父母より寄贈されたもので、市川市在住の田中寿子さんという彫刻家が、六ヵ月の期間をかけた力作で、身長は一三五センチある。台座は、高さ九〇センチ、幅四五センチの大理石で、講堂の改修工事を担当した秋元建設株式会社の寄贈によるものである。

除幕式は、平成二年七月十八日に行われ、生徒を代表して中学校一年生の菊地明日香、中嶋洋子さんの二人によって幕が切って落とされ、清純で美しい少女像が現れて、感激の一瞬を迎えた。この少女像は、制作者の田中さんによ

少女ブロンズ像除幕式

って「ながれ」と命名された。それは、将来に向かって限りなく伸びていく清純な少女の姿を表現したものと言われ、本学院教育にふさわしく、講堂のシンボルとなった。

ガス暖房システム完成

さらに、父母の協力のもとにガス暖房システムの設置が計画された。さきに、創立四十五周年の記念事業として、実験実習施設について、従前のプロパンガスから都市ガスに切り替えたが、今回は、各普通教室、特別教室及び大講堂のすべてをガス暖房化することとなった。

今回の工事費としては、約二億円の多額の経費を必要とした。その工事費の二分の一について、父母の協力費として年一万三、〇〇〇円を一二ヵ月に分割して負担していただくこととした。

工事は、平成二年五月に始まり、同年八月末完成予定で進められ、九月末にすべて完成した。普通教室だけでも一六四教室という大工事であった。

従前の石油ストーブと異なり、安全で清潔、しかも暖房効果は大きく、生徒は寒さ知らずで、快適に学習できる恩恵に浴している。他の学校には少ない近代的施設が完備し、大きな喜びと誇りを感じた。

第十五節　創立五十周年記念式典挙行

一、わが学びやぞいやさかゆ

平成二年度は、本学院創立五十周年にあたり、記念式典は、同年十月二十一日、稀に見る和やかな秋晴れに恵まれて盛大に行われた。

当日は、文部省より文部大臣代理として、渡辺隆私学助成課長がご出席下さったのをはじめ、石橋一弥前文部大臣、井上裕参議院議員、臼井日出男衆議院議員など、多数のご来賓の方々をお迎えした。とくに、異色な方としては、第一次海部内閣のとき女性としてはじめて官房長官をつとめられた森山真弓参議院議員のご臨席であった。森山先生は、学院長の奥様が東京都立第三高女で教鞭を執っておられたころの教え子で、現在もずっとご交際なさっておられるご関係から、本学院創立五十周年記念式典に是非ご臨席をとご案内申し上げたところ、快くご列席下さりご祝辞をいただいた。

式は、エレクトーンによるスーザの勇壮なマーチ「自由の鐘」の演奏が終わると同時に、午前十時三十分開幕となる。国歌斉唱に続いて校歌斉唱では、創立以来歌い継がれている「言の葉伝う……」を、合唱団のリードのもとに、卒業生、父母をはじめ来会者全員による大合唱が、会場一杯にこだました。

学院長式辞は、創立より現在に至る本学院の発展と、これからの抱負について述べられ、その重厚な式辞は来会者に深い感銘を与えた。ついで、功績者への感謝状一五名、永年勤続教職員一〇七名の表彰を行う。その後、ご来賓の方々から心あたたまる祝辞をいただく。

最後に、舞台を演奏ステージに切り替え、二期会会員のソプラノ歌手木村珠美さん（本学院華道講師、木村恵美子先生のご令嬢）により、モーツァルト作曲モテット「踊れ、喜べ、幸いなる魂よ」から「アレルヤ」を独唱、つづいて、プッチーニ作曲オペラ「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」を披露、その素晴らしい歌唱力に会場は魅了された。

式典に花を添えた木村珠美さんのソプラノ独唱

こうして、一時間を予定した式典は順調に進行し閉式となった。来会者は約一、三〇〇名で、講堂の一階席に父母の方々や卒業生、二階席に来賓の方々がお着きになり、さしもの大講堂も来会者であふれ、盛大でかつ和やかな記念式典となった。

学院長式辞

本日は、本学院創立五十周年の式典に際し、ご来賓、ご父兄、卒業生の皆さま、ご多忙の中を、多数ご臨席下さいまして、記念すべき式典を盛大に挙行できますことは、私たちの大きな喜びであり、心からお礼申

し上げます。

本学院は、昭和十五年四月、昭和女子商業学校として、この東菅野の地に開校しました。

当時は、日中間に不幸な戦争が続き、国内は戦時体制がしかれていました。男子の多くは戦場に出征しました。そのあとをうけもつものは女子であり、そのために、女子職業人の育成は、国家の急務でありました。このことから、本学院は、女子商業学校として発足したのであります。

開校後、戦争は更に拡大し、翌十六年十二月には、太平洋戦争に発展し、わが国は、未曾有の大きな苦難を経験しました。そして、遂に、昭和二十年八月、敗戦という破局的な結末により戦争は終結しました。

戦後は、国家の疲弊の中に、教育の普及、発展をめざして、学制の改革、いわゆる六・三制が実施されました。国力の著しい衰退の折に、このような大改革の実施は、わが国にとり、大きな苦しい試練でありました。

本学院も、新学制に基づき、従前の学校制度を改め、新たに、中学校、高等学校を設置しました。ついで、小学校、短期大学を新設して、一貫的な学校体系を整えました。

その後、地域社会の要望などもあり、栄養専門学校、幼稚園を併設しました。つづいて、高校生急増期に

式辞を述べる学院長先生

対応して、千葉市幕張に昭和学院秀英高等学校及び同附属中学校を設置しました。

このように、数々の変遷をとげながら、総合的な学園として発展し、幾星霜を経て、ここに創立五十周年を迎えました。

本学院の創立者は、伊藤友作であり、私の父であります。若くして教育を志し、千葉商業高等学校長を最後に、公立学校を退任しました。退任後、なお育英の道を捨て難く、私立学校の創設を志したのであります。

しかし、私立学校の創設は、なかなか大変な仕事であり、また、多大の資金をも必要とし、その実現は容易なことではありませんでした。

学校創設を志してから数年、数多くの苦労を重ね、また、知人の財政的な援助をも得て、漸く学校創立にこぎつけることができたのであります。

創立者伊藤友作が、学校創立に当たり、教育の理想として掲げたものは、現在、校訓として示されております「明敏謙譲」ということであります。秀英の学校では、これを現代的に改め、「明朗謙虚、勤勉向上」としました。それが、いわゆる「建学の精神」であります。明朗にして、積極的な生活態度を身につけ、謙虚な心をもつ人間をつくることを教育の目標としました。この理想は、長い歴史を経て、本学院の校風として定着してきています。

私は、昭和三十六年四月、学長、校長となり、同四十年一月から、父の死去により、学校法人昭和学院の理事長を兼ね、今日まで、本学院の教育と経営にたずさわってまいりました。

創立五十周年を迎えるにあたり、本学院の今後の課題に思いをいたし、数々の事業を計画し、とりくんでまいりました。

大講堂の大改修をはじめ、小学校では、図書室をはじめ特別諸施設、中学校・高等学校では、武道場を中心とした体育施設の「洗心館」、教職員、生徒の研修施設としての「教学館」を新設しました。また、秀英中学校、高等学校では、独立図書館、視聴覚室、情報機器学習室を増設し、短期大学等の関係では、情報処理学習室、語学演習室それに、視聴覚室などの施設設備の充実を図りました。

これらの記念事業は、今後、新しい時代にふさわしい人間育成に大きく役立つものと思います。

また、創立五十周年を機会に、ご父兄のご協力のもとに、暖房システムのガス化を学内すべてにわたり、新設することもできました。

創立五十周年という記念すべき時、私は創業の昔を顧み、長きにわたり本学院教育に対し、多大のお力添えを下さった過去及び現在の諸先生方、ご父兄それに学校関係の皆さんのご厚情に深く感謝を申し上げます。

本学院は、創立以来五十年を経過しましたが、その生命は永遠であります。私たちは、これからも、未来に向けて大きな希望をかざし、生々発展を期してまいりたいと思います。

関係の皆さまには、これからも、本学院にあたたかな、限りないご支援をお寄せ下さいますよう、心よりお願いし式辞といたします。

二、記念祝賀会開催

式典終了後、第一体育館において祝賀会が催された。会場の四方には紅白幕を張りめぐらし、正面には仮設のステージを設置し、その背面には金屏風を立て、袖には大きな祝花が飾られ、祝賀会場にふさわしく整然と準備された。また、会場内のテーブルには種々の料理が並べられ、両サイドには、寿司、そば、おでんなどのコーナーを設けるなどして、来会者を歓迎することができた。

祝賀会は、卒業生の菱木美英子さんによる祝舞、長唄「鶴の寿」の披露により幕を開けた。学院長の挨拶についで、堀越克明日本私学連合会会長はじめ、多数の来賓の方々から祝辞が述べられた。祝杯を挙げ祝宴に入り、会場一杯の来会者は、用意された種々の料理を召し上がり、和やかで華やいだ雰囲気のうちにお開きとなった。

祝賀会、菱木美英子さんの祝舞により開会

第十六節　多大な功績を残して

一、学院長千葉県私学団体連合会会長を退任

本学院創立五十周年記念の年である平成二年五月、学院長伊藤一郎先生は、千葉県私学団体連合会会長及び、千葉県私立中学高等学校協会会長の要職を退任された。

学院長先生は、千葉県私学の会長として、昭和四十七年から十八年もの長きにわたり、広く私学教育の発展にご尽力され、そのご功績は多大なものであり、退任を惜しむ声は多かった。ご退任後は、千葉県私立中学高等学校協会の顧問として、その助言指導に当たられることになった。

なお、「千葉県私学」（第二十一号）に掲載された学院長先生の手記「私の歩んだ私学の道」は、千葉県私学の会長としての艱難辛苦と、そのご功績を窺い知ることができる。

二、私の歩んだ私学の道

学院長　伊　藤　一　郎

私は千葉県私学会長として十八年の長きにわたってその職にあり、関係の皆さまに大変ご協力をいただいたことを深く感謝している。

私が会長であった前後、私の歩んだ道を思い出すままに記してみよう。

昭和四十年前後は、私学の発展期であり、私学の資金需要が増大したために、私学への融資機関として、中央に私学振興会が設置された。しかし、その資金量は、私学側の要望を充たすことができない状態であったので、その不足額を充足するために、地方に私学振興会がつくられはじめた。本県も昭和四十一年に、社団法人千葉県私学教育振興会を設立した。これは、私たちと県との話し合いで、県と加入法人とが同額出資して、その資金を銀行に預託し、会員の資金借入について融資斡旋を行うものである。私は、初代の理事長として、初期における会の運営にあたったが、資金不足のために大変難渋した。

その二は、私学教職員の定着化と、永年勤続の奨励のために、その優遇措置として、私学教職員退職金制度を創設したことである。この制度は、私学教職員からの負担を受けずに、しかも公立教職員と同様の退職給付を行なうものである。その財源としては、県の補助金と加盟法人が教職員の私学共済組合の標準給与に基づく負担金を拠出する。幸い県の協力を得て、創設の作業は順調に進み、昭和三十九年、北海道につぐ全国二番目の私学教職員退職金財団を発足させることができた。昭和四十五年度より私が理事長に就き、現在に至っている。ただ、県の補助金が低額であったため、常に財政基盤は弱体で苦慮している。本年度より、その改善策として、退職金年金制度の導入に踏み切った。

その三は、昭和四十五年、私学相互の協力と、私学教育の向上のために、私学会館建設計画を立て、その推進をはかることになった。私はその衛にあたり、最大の努力をした。建設用地は、県有地で、海浜埋立地一〇〇坪（現在地）を無償貸与をうけたが、問題は建設資金であり、全く零であって、どのように調達すべきか苦心した。まず、私の個人保証により千葉市内の都市銀行から、三、〇〇〇万円を借りうけ、ついで、県・市に建設補助金を願い出て、三、五〇〇万円を援助され、さらに不足分について県内私学の負担ということで、やっと約一億円の建築費を調えた。文字通り「無から有」を生み、予定通り私学会館を完成させることができた。

その四は、高校生の収容に関する問題であった。人口の地域による偏在から、過疎・過密の現象がでて、これに関し適切な対応を必要とした。文部省は昭和五十年、各都道府県に対し、「公私立高等学校協議会」の設置を求め、本県においても、同年公私立高等学校協議会が発足した。この協議会の性格は、公私立高校の新増設・適正配置など重要事項について協議し、教育行政における基本的方針を決定するもので、特に、公立の新増設により私立を圧迫しないように公私立間の調整をめざすものであった。私は、当初から、私立高校代表としてこの協議会に参加したが、協議会設置当初は、本県が急増県であるので、公立高校の新設計画が前面に押し出され、協議会はその計画を追認する機関のようなものであった。私は、私学の立場から、公立高校の新増設に反対し、計画の変更を求めるなど、激しく討論を交わした。こうして、公私の理解が次第に深まり、本県私学の発展に役立つものとなった。

その五として、現在就学人口の減少により、生徒の収容の問題がクローズアップしている。この問題に対しては、公私立間、私立相互の間に協力体制がつくられなければならない。お互いが共存共栄、私学教育の充実、地域社会における私学志向の増大など、私学への信頼を高めることに努力しなければならないと思う。